

S H I R O



国枝史郎

神 しん 州 しゅう 纈 こう 纈 けつ 城 じょう (上)



伝奇文庫

K U N I E D A

国枝史郎伝奇文庫（五）

しんしゅうこうけつじょう

神州額額城（上）

昭和五十一年三月十二日第一刷発行
昭和五十一年四月二十日第三刷発行

著者 国枝史郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二

郵便番号 一一二

電話 東京（〇三）九四五―一一一（大代表）

振替 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Sue Kunieda 1976 Printed in Japan (X-1)

国枝史郎云奇文庫（五）



神州しんしゅう 額ごう 額けつ 城じょう
||
上

横溝正史・半村良・尾崎秀樹

講談社

神^{しん}
州^{しゅう}
瀬^せ
瀬^せ
城^{じょう}
(上)

第一回

一

土屋庄三郎は邸を出てブラブラ条坊を彷徨った。

高坂邸、馬場邸、真田邸の前を通り、鍛冶小路の方へ歩いて行く。時は朧ろの春の夜でもう時刻が遅かったので邸々は寂しかったが、「春の夜の艶かしさ、そこはかとなく匂ひこぼれ、人氣なけれど賑かに思はれ」で、陰氣のところなどは少しもない。

「花を見るにはどっちがよからう、伝奏屋敷か山県邸か」

鍛冶小路の辻まで来ると庄三郎は足を止めたが、「いつそ神明の宮社がよからう」
こう呟くと南へ折れ、曾根の邸の裾を廻わった。

しかし、実際はどこへ行こうとも、またどこへ行かずとも、花はいくらでも見られるのであった。月に向かつて夢見るような大輪の白い木蘭の花は小山田邸の塀越しに咲き下を通る人へ匂いをおくり、夜眼にも黄色い連翹の花や雪のように白い梨の花は諸角邸の築地の周囲を靄のように暈している。桜の花に至っては、信玄公が好まれるだけに、躑躅ヶ崎のお館を巡り左右前後に延

びているこの甲府のいたるところに爛漫と咲いているのであったが、わけてもお館の中庭と伝奏屋敷と山県邸と神明の社地とに多かつた。

「花を踏んで等しく惜しむ少年の春。燈に反いて共に憐れむ深夜の月。……ああ夜桜はよいものだ」

小声で朗詠を吟じながら、境内まで来た庄三郎は、静かに社殿の前へ行き、合掌して叩頭いたが、

「お館の隆盛、身の安泰、武運長久、文運長久」

こう祈つて顔を上げて見ると、社殿の縁先狐格子の前に一人の老人が腰かけていた。臙ろ臙ろの月の光も屋根に遮られてそこまでは届かず、婆娑として暗いその辺りを淡紅色にはのめかせて何やら老人は持っているらしい。

おおかた参詣の人でもあろう。——こう思つて気にも止めず、庄三郎は足を返した。と、うしろから呼ぶものがある。

「もし、お若いお侍様、どうぞちよつとお待ちくださいませ」

——それは噓れた声である。

で、庄三郎は振り返つた。

山袴を穿き、袖無しを着、短い刀を腰に帯び、疊んだ烏帽子を額に載せ、輝くばかりに美しい深紅の布を肩に掛けた、身長の高い老人が庄三郎の眼の前に立っている。

「老人、何か用事かな？」

庄三郎は訊いて見た。

「布をお買いくださいますし」

おずおずとして老人は云う。

「おお、お前は布売りか。いかさま紅い布を持っておるの」

「よい布でございます。どうぞお買いくださいますし」

「よい布か悪い布か、そういうことは俺には解らぬ」庄三郎は微笑したが、「俺はこれでも男だからな」

「お案じなさるには及びませぬ。布は上等でございます」

老人は執念く繰り返す。

「そうか、それではそういうことにしよう、よろしい布は上等だ。しかし、俺には用はないよ」云いすてて庄三郎は歩き出した。

しかし布売りの老人は、そのまま断念しようとはせず、行手へ廻わってまた云うのであった。「布をお買いくださいますし」

「見せろ！」

と庄三郎は我折れたように、とうとうこう云って手を出した。

「なるほど。むうう。美しい色だな」

渡された布を月影に隙かしつくと眺めた庄三郎は思わず感嘆したのであった。

「はい美しい色でございます。そこがその布の値打ちのところ……」さもこそとばかりに老人は云った。

「若い女子の喜びそうな色だ。なんと老人そうではないかな」

「はいさようでございます」

「こちら辺にはお邸も多い。若い女子も沢山いる。お邸方の奥向へ参って若い姫達のお目かけたら喜んで飛び付いて参ろうぞ」

「今日も昨日も一昨日も、もうかれこれ十日余りも、お邸方へ参上致し、さまざまご贔負にあずかりましたが、この布ばかりは買っただけず、一卷だけ残りましてございます」

「どなたの嗜好にも合わないと思えるな」

「皆様、恐らしいと申されます」

「なに恐らしい？」と不思議そうに、「はて何が恐いのか？」

「そのお色気でございます」

「色気と云っても、紅いだけではないか」

「人間の血で染めたような、燃え立つばかりの紅い色が、恐らしいそうでございます」

「アッハッハッハッ、馬鹿な事を。さすがは女子、臆病なものだな」

もう一度布を差し上げて、月の光に照らして見たが、庄三郎は思わず身顫いをした。

二

と、布売りの老人はあるかなしかに嘲笑ったが、

「お侍様、あなたまでが……」

「何！」

と庄三郎は振り返る。

「頼えておいでなされます」

「痴けた事を！」

と一喝したが「これ、この価なんぼうじゃ？」

「太鼓判一枚でございます」

「それ持ってけ！」

と抛り出した。チリンと鳴る金の音。屈んで拾う布売りの姿があたかも大蜘蛛の這ったように、地面に影を描き出したが、さっと吹いて来た夜嵐に桜の花がサラサラと散り、その影をさえ埋めようとする。

こういうことのあったのは永禄元年のことであるが、この夜買った紅巾の祟りで、土屋庄三郎の身の上には幾多の波瀾が重畳した。

しかし作者はその事に関して描写の筆を進める前に、土屋庄三郎その人について少しく説明しようと思う。

武田家において土屋といえは非常に立派な家柄であつて、無論甲陽二十四将の一人、代々武功の士を出したが、別けても惣藏昌恒は忠義無類として知られていた。

後年勝頼が四方に敗れ小山田信茂には裏切られ、天目山で自尽した時、諸将ほとんど離散した中に、惣藏一人己が子を殺し、一心なきを現わした上、最後のお供、仕ったほどで、この義烈には敵ながらも徳川家康が感心し、苦心して遺族を尋ね出し常陸土浦九万石に封じた。土屋子爵はその後胤である。家康もなかなか粹の事をする。もっとも家康は信玄のためにかつて三方ヶ原で破ら

れながらも甲州流の兵法には少なからず敬意を払っていたし、清和源氏の名門で甲斐源氏の棟梁たる武田家その物に対しても尊敬の念を持っていて、勝頼の首級に対しても、信長のように足蹴にはせず、君、武勇におかせられては父君にも勝らせ給えど、いまだ年若くおわせしたため跡部長坂の小人を愛し武功の老臣を斥け給い、無謀の軍を起さし果て今日の非運を見給うはまことに無残の限りであると、ちよつと首級桶を載いてホロリと一滴こぼしたそう、これを聞いた武田の遺臣ども、武骨者だけに感激するのも早く、我も我もと安い月給で徳川家に随身したそうであるが、これを今日の皮肉極まる歴史家どもに云わせると、「なあにそれも家康という狸爺のお芝居さ。勝頼の首級をいただいたところで別に資本がかかるのではなし、ホロリと一滴こぼしたところでそのため眼病になりもしない。一滴の涙が大効を奏し数度の戦いに心身を練った武田家の遺臣を傭うことが出来たら、こんなうまい商売はないよ」と唯物的に片付けてしまうが、治まれる御世の時代と戦国時代とは人心が異う。そう味もなく片付けては、歴史の花たる戦国武士に對し、ちと失礼ではあるまいか。

それはともかく土屋家なるものは、武田家にありては由緒ある名家で、一族の数も多かったが、信玄時代では惣藏昌恒が、土屋宗家の当主であった。そうして「神州巖城」なるこの物語の主人公土屋庄三郎昌春は実に惣藏の甥なのであった。

そうして庄三郎は孤児であつた。

庄三郎本年二十歳。十六年前四歳の頃に、父母と別れてしまったのである。と云つて父母は死んだのではない。行衛不明となつたのである。

庄三郎の父は庄八郎と云つて惣藏のすぐの弟であつたが、武勇にかけては一族の中でも並ぶも

ののない武士であつて、有名な海口の戦では一番乗りをしたほどである。

天文五年十一月、武田信虎八千を率い信濃海口城を襲つたが城の大將平賀源心よく防いで容易に陥落しない。十二月となつて大雪降り、駈け引きほとんど困難となつた。さすが猛將の信虎ではあつたが、自然の威力には叶うべくもなく見す見す城を後にして一旦軍を帰すことになつたがもちろん心中は無念であつた。この時晴信(信玄)十六歳、父に従つて軍中にいたが自分の陣中へ帰つて来ると腕を組んで考え込んだ。と、そこへ顔を出したのが土屋庄八郎昌猛である。庄八郎この時十九歳、晴信よりは三つ上であつて、お側去らずの寵臣であつた。

「殿、なんとなされましたな？」心配そうに訊いたものである。

「莫迦な話だ。退陣だそうな」晴信は顔を顰めたものだ。

「雪が深うございますからな」顔を見い見い庄八郎は云う。

「雪が深い？それがどうした！冬になれば雪も降るよ。降つた雪なら積りもしようさ。莫迦な話だ」と益々不機嫌だ。

「寒さが厳しゅうございますからな」庄八郎はまた云つた。顔を見い見い云うのである。

三

「何を申すか。つまらない事を」

晴信はギロリと庄八郎を睨む。

「敵とて人間でございます。やはり寒うございませうよ」
この言葉には意味がある。で、晴信は黙っていた。

「甲州勢退くと見るや、城兵一時に安心し、凍えた身肌を暖めんものと甲を脱ぎ鎧を解き弓矢を捨て刀鎧を鞘にし……」

「わかった！」

と不意に晴信は庄八郎の言葉を遮った。

それから父の前へ出た。

「殿致しとうございます」こう晴信は云ったものである。すると信虎はカラカラと笑い、嘲けるようにこう云った。

「この大雪には城兵といえども、門をひらいて追っては来まい。追い縋る敵のないうちを知って殿を望むは卑怯であらうぞ」

しかし晴信は動じようともせず「殿いたしとうございます」とただ繰り返すばかりであった。で、許されて陣中へ帰ると、すぐに晴信は庄八郎を呼んだ。ここで密談が行われる。それからの事は頼山陽が、作者のような悪文でなく非常な名文で書いている。

以兵三百殿。後大軍二数里。止舎。親警其兵曰。勿釈甲。勿卸鞍。食於馬而後食。五更即発。唯吾所嚮是視。兵皆窃嗤是曰。風雪如此。何為警。五更。晴信即発。還向海口。与三百騎冒雪馳。味爽抵城。源心已散遣其兵。独与百人留守。晴信分兵為三。自以三隊入城。二隊揚幟城外。応之。城兵不測其衆寡。不戰而潰。乃斬源心。以其首歸獻。一軍大驚。云々。

これは驚くのが当然である。しかしてこの計を献じたのも、敵將源心を討ち取ったのも皆土屋庄八郎であつた。

その後晴信は父を逐い、自甲斐の太守となつたが、晴信をして父を逐わせたのも、庄八郎の献策からであつた。

さすが寅歳の産れだけに信虎は豪勇の性格であり、その性格が役立って、甲斐国内の豪族ども、すなわち都留郡の小山田氏、東郡の栗原氏、河内の穴山、逸見の逸見氏、また西郡の大井氏などを権威をもつて抑え付け、悉く臣下としたばかりか、隣国信濃では平賀、諏訪、また小笠原氏、村上氏、木曾氏などとも兵を構えて甲斐武者の威を輝かせたが、永正十七年飯田河原で遠州の大兵を破つて以来、すっかり天狗の鼻を高め、暴戾の振る舞いが多くなりむやみと家来を手討ちにした。累代の四臣と云われたところの馬場虎貞、山県虎清、工藤虎豊、内藤虎資、四人ながら手討ちになり、この他硬骨の士五十人、刀の錆となつたのであつた。

そこへ起こつたのが家督問題で、森敵沈痛の晴信よりも颯爽軽快の次子信繁の方が、信虎の性質に合うところから、それを家督に据えようとした。

驚いたのは老臣どもで憤慨したのは晴信である。そうして妙策を献じたのは土屋庄八郎昌猛であつた。

「殿、ご心配には及びませぬ。今川をお頼みなさいまし」

当時今川義元と云えば駿遠参の总管領で匹儔のない武将であつたが、信虎の一女を貰つていたので晴信にとっては姉婿に当たり日頃から二人は仲がよかった。

「なるほど、これはよい勘考だ」晴信は嬉しそうに頷いたが、「大事な智恵をこれで二度まで俺はお前に借りてゐる。疎かには思わぬぞよ」

庄八郎の手を取つて押し戴いたということである。信虎は間もなく騙られて、今川家へ幽囚

され、甲斐の国は何んの波瀾もなく晴信の物となつたのであつた。

土屋庄八郎昌猛はこれほど勝れた人物であつたが家庭的には不幸の人で、高坂弾正の娘であり己が妻であるお妙の方を信ずることが出来なかつた。お妙の方には恋人があつた。娘時代からの恋人で行々はその人の妻となり楽しい家庭を作ろうものと堅く信じていたらしい。その恋人は他ならぬ庄八郎の実の弟の土屋主水昌季であつた。

主水は兄の庄八郎やまた長兄の惣藏が武勇一図の人間であるのと大いに趣きを異にしてきわめて文雅の人物であつた。容貌も秀麗、風姿も典雅、和歌詩文にも長けていて、今日信玄の作として世に知られている和歌の多くはまことは主水の作であつた。

甲州一の宮浅間神社に詠進したる短冊の和歌「うつし植うる初瀬の花のしらゆふをかけてぞ祈る神のまにまに」も、文字こそ信玄の真蹟であれ歌は主水の作なのである。この他彼の秀逸としては、

いはと山緑も深き榊葉をさしてぞ祈る君が代のため
君を祈る賀茂の社のゆふたすきかけて幾代か我も仕へん
うきものを寢覚の床の曙に涙ほしあへぬ鳥の声かな

四

これらの和歌でも想像されるように、主水は敬虔の心を持った柔和な人物であつたので、恋人を兄に横取りされても執拗く怨むような事もなくむしろ諦めていたのであつた。そうして恋人お妙の方も、穏しい真面目の女性だったので、既にその恋が破られてあらぬ人の妻になつてから

は、努めて良人に貞節を尽くし、主水との恋は心の墓場に深く葬ることにした。しかし主水と庄八郎とは血を分けた真実の兄弟である。それこそ二人は毎日のように顔を合わせなければならなかった。自然お妙とも顔を合わせる。木石でない男女だ。血の騒ぐのは当然である。それが庄八郎には不快である。

息苦しい恋の三角関係！それが五年間続いたのであった。そうして庄三郎の四つの時、突然主水の姿が消えた。ややあつてお妙が行衛不明となり続いて庄八郎が身を隠した。爾来今日まで杳として三人の行衛は知れないのである。

孤子となった庄三郎は、同族土屋右衛門が、快く引き取って養育したが、父母のない子はどこか寂しくどこか偏したものであつて文にも秀で、武にも勝れ母に似て容姿も美しく天晴れ優美な若武士であつたが、いわゆる詩人的気稟とでも云おうか、憂鬱であつてしかも快活、真面目であつてしかも滑稽、そうしていつも瞑想的で現実の事を好まなかつた。

庄三郎はよく云つた。

「……ね、俺はこう思うのだ。俺の両親は生きているよ。しかし一緒に住んではいまい。自由に別に住んでいるだろう。父は父らしい活方でね。母は母らしい活方でさ。そうして主水叔父さんも云うまでもなく生きているのさ。ああ俺には主水叔父さんがどんなに懐しく思われるだろう！歌人だったというのだからね。しかし無論父や母はそれにも増して恋しいよ。どうぞ一度逢いたいのだ。俺は強く信じているよ。いずれはきつと逢えるものだよね。見るがいい美しいあの雲を！夕陽に輝いているじゃないか。あの雲の奥に居るのだよ。父と母と叔父とがね」